西陵高校新聞

発行
長崎県立西陵高等学校
新聞部

部員

〔3年生〕
田中愛依・山口あい
古道晴菜・吉田愛葵
平山麻琴
村上心優華

〔2年生〕
川﨑和音・菅 海光
渋谷如那・藤田倖奈
渡海楓果・山口陽香
荒島美鈴・髙森心優嘉
牧野咲花・丸亀有莉乃
弥永佑泉・山口菜々子

〔1年生〕
陣野斗哉・小松栞子
林真心・山口紗耶
吉岡咲良・金子嘉凛
原田颯海・甲斐怜奈
木下兆太・山下柚乃

SAGA国民スポーツ大会カヌースプリント競技

男子カヤックフォア　8位入賞

3年間の集大成「一緒に戦えてよかった」

SAGA2024国民スポーツ大会カヌースプリント競技が10月11日から14日まで佐賀市富士しゃくなげ湖水上競技場で行われ、男子カヤックフォア200m決勝で西陵が8位に入賞した。

■辻村侑太郎さん（3－1）

決勝は理想のスタートではなかったが、なんとか入賞できてよかった。ゴールした後は、3年間を共にした仲間や家族の顔が浮かんできてやり切ったなと思った。監督の中井先生が「何かあったとしても、ぐっとこらえて我慢して乗り越えろ」と熱い言葉をかけてくださり涙が止まらなかった。これから寒くなって部活が憂鬱になっていくと思うが、後輩のみんなには仲間と支えあいながら乗り越えてほしい。

■山﨑澪王さん（3－5）

入部当初は全国大会で決勝に進むなんて考えてもいなかったが、出場も叶え、全国の舞台の決勝でしっかり戦うことができた。特にインターハイや国スポは人生の中でとても特別な時間になった。長い期間きつい部活を一緒に乗り越えてくれた。フォアのみんなにはありがとうと伝えたい。最後は3人で笑って終われてよかったし、一緒の艇で戦えてとても楽しかった。

■若林拓利さん（3－1）

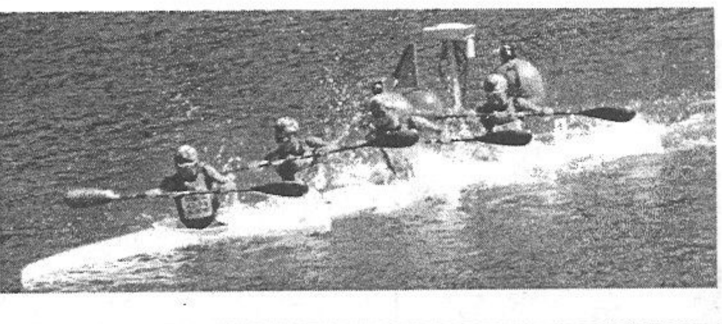
決勝は隣のレーンの東京都のチームが想像より速く、焦ってしまった。思うようなレースはできなかったが、高校最後の大会で入賞できたので嬉しかった。準決勝を1位で勝ち上がったときは胸が熱かった。練習をたくさんしないと全国では勝てないことを思い知ったので、後輩のみんなにはコツコツ練習を頑張ってほしい。個人のポテンシャルもあるし、みんなやる気があるので期待している。

■林田新汰さん（3－1）

うまくいかないこともあったが、入賞できて嬉しかった。これからいろんな困難があっても頑張りたい。フォアは解散したが3人のことは心の中で同じクルーだと思っている。練習を怠ると本番でも結果が出ないので、後輩のみんなは練習を怠らず頑張ってほしい。

3年間の集大成を国スポで証明したカヌー部の活躍は素晴らしい。（渋谷）

表彰台に立ち、勇ましい姿。まぶしい笑顔のカヌー部のみなさん



入賞に向け、最後の力を振り絞る

九州マーチングコンテスト結果

金賞を受賞、全国は後輩に期待

3年生は感謝を語る

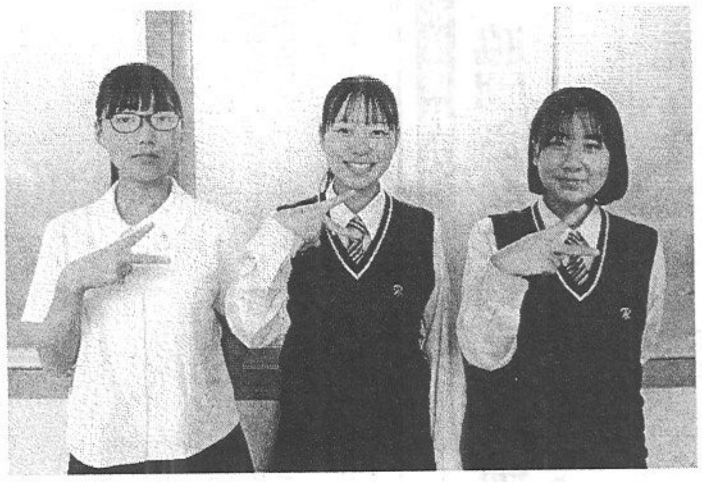
吹奏楽部

第42回九州マーチングコンテスト、高等学校の部が10月13日、大分県ビーコンベンションホールで行われ、金賞を受賞した。

部長の多賀友香さん（3－6）は「一年間、部員全員で頑張ってきた。目標達成はできなかったが、練習が糧となり、素晴らしいものとなった。本番を通して絆が強くなってよかった」と笑顔で話し、3年間、部活動が忙しかったからこそ、部活と勉強の両立の難しさを学ぶことができたと振り返った。部員に向けて「活動できていることに感謝の気持ちを持って、これからもたくさんの人を笑顔にできる演奏を届けていってほしい」と後輩たちに期待を込めた。

副部長の山本凪沙さん（3－6）は「全国大会を目標に頑張ったが出場することができなくて悔しかった。副部長という役職を経験し、成長できたと思う」と振り返った。顧問の森先生に向けて「一年次から37回生を持ちあがって、私達のために全力を尽くしてくださっていた」と話し、下川先生には「モチベーションを上げるような言葉を言ってくださった」と感謝していた。

副部長の古木真桜さん（3－6）は「リーダーとしてみんなを引っ張ることができなくて悔しさが残った。たくさんの経験ができ、自分を知ることができた」と振り返った。顧問の遠藤先生に向け「強く指導されることも多かったが、たくさん褒めながら育ててくださった。くじけずに最後までやりきれたのは先生のお陰だと思う」と先生への厚い信頼を感じた。（木下）



3年間の経験と感謝を語る吹奏楽部のみなさん

コラム

テストに向けて頑張ること

2学期は息をつく間もないほど、テストの数が多い。11月8日にはLiterasの検定テストがあり、11月22日から27日には中間テストが控えている。テストの数が多いため、日頃から復習に努め、時間をより多くとり、有効に使うことを大切にし、本番を迎えたい▲私は毎日コツコツと学習し、期末テストに向けて頑張りたいと思っている。実力を100パーセント発揮するには、十分な睡眠を摂って疲労を回復し、記憶を脳に定着させることが大切だと聞いた。十分な睡眠を摂るため、日をまたぐ前に就寝しようと思う。体調を崩しやすくなっているので、3食をしっかり食べ、防寒対策に努め、手洗いうがいを徹底して、体調管理に気を配りたい▲テストに集中しすぎるのではなく、外に出て、軽く運動をしたり、好きな本を読み、定期的にリフレッシュしたい。前回の結果より良い結果を出したい。（陣野）

岩田屋三越のＳＤＧｓ

ペーパーレス、農業、障がい者雇用などに取り組む

ＳＤＧｓ

持続可能な社会づくりに貢献

岩田屋三越（百貨店業、福岡市）は百貨店経営に加え、岩田屋三越ファームや障がい者雇用など、幅広い事業を行っており、地域とのつながりを大切にしながら様々なＳＤＧｓに取り組んでいる。今回は、岩田屋三越が取り組むサステナビリティ（持続可能な取り組み）について、総務・経営企画部の古賀美悠さんと外商第一部の手塚翔子さんとアシスタントマーチャンダイザーの小林勇貴さんに話を伺った。

左から、古賀さん、手塚さん、小林さん。笑顔で岩田屋やの魅力を語る

■ペーパーレス化のメリット

セールなどのチラシを印刷からウェブサイトでの発信に切り替え、一年間でＡ４用紙を約１トン削減できたし、作業効率が良くなった。紙の代金だけでなく、デザイン料などの諸費用もなくなった。お客様のデジタルに対する拒否感も少なくなって、取り組みを始めてよかったと思う。

■障がい者雇用

鹿児島に岩田屋三越の特例子会社があり、この会社では障がい者の方が働きやすいように配慮している。障がい者の方が住み込みで働けるような工夫を施した設備を導入したり、障がいの度合いに合わせて作業の割り振りを行っている。手塚さんは「実際に自分たちもやってみたが、とても難しく、障がい者の方だからこそできることだと思った」と話した。

岩田屋では、子会社とのつながりを大切にしており、年に一度、大運動会を行い、コミュニケーションを取っている。他の企業にはない岩田屋の良いところだと話す。

■岩田屋三越ファームについて

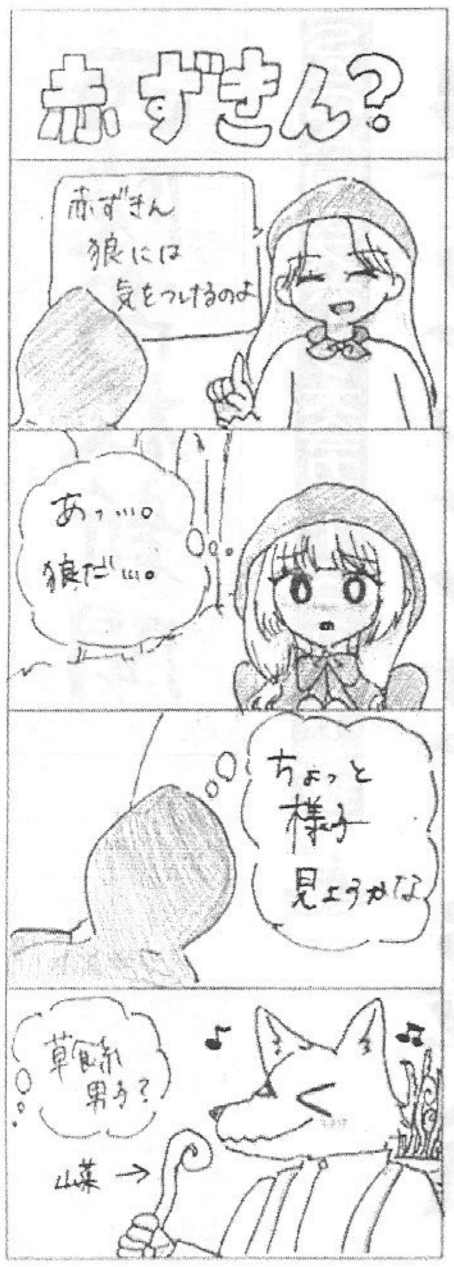
岩田屋三越ファームは、従業員が地域の人と一緒に農作物を育て、お客様に提供することで、農業を中心とした環境問題に関心を持つきっかけづくりをする活動だ。具体的には、稲作や八女茶の栽培を行っている。岩田屋三越の屋上にある養蜂場では約15万匹のミツバチが蜜を集めており、実際に販売されている。この取り組みは、従業員が地域の方々と共に農業を行うことによって、人と地域をつなぐという点で持続可能な社会づくりに貢献している。

■西陵卒業生の小林さんから後輩に向け

小林さんは、なんと西陵高校出身。小林さんは「勉強だけでなく息抜きを大事にしてほしい」と優しい言葉をくださった。そして、「職業や大学についてたくさん調べ、将来についてしっかり考えてほしい」と付け加えた。

岩田屋さんへの取材を通し、社会に貢献することの大変さを知ることができた。これから私たちにできることを探し、身近なことから実践していきたいと思った。

（山下・山口紗）


赤ずきん？
赤ずきん　狼には　気をつけるのよ
あっ…。狼だ…。
ちょっと様子見ようかな
草食系男子？
山菜 →

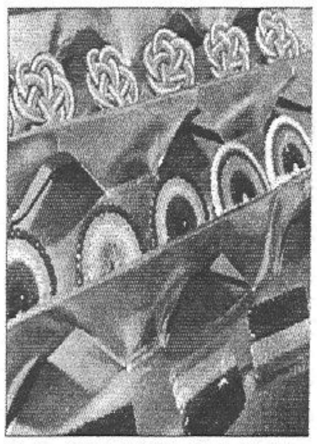
セクシュアルマイノリティー【第４回／５】

異性婚と同性婚の格差を考える

■パートナーシップ制度

パートナーシップ制度とは、自治体が独自に同性カップルを結婚に相当する関係として認定する制度だ。現在、長崎県内では長崎市と大村市がこの制度を導入している。パートナーシップ制度があることで、市営住宅に家族として入居したり、病院で家族として扱われたり、パートナーの捜索願を出したりなど、制度導入前にできなかったことが可能になる。

大村市では、同性カップルの子供も含めて家族として認定する制度である、ファミリーシップ制度も導入されている。この制度のおかげで、生みの親とパートナーの両方が学校の家族参観に参加したり、病院に連れて行ったりすることができる。


Take it! 虹が他団体と協力して作ったレインボーバッジ。6色のレインボーはLGBTQ・コミュニティを象徴する

■同性婚

現在、日本では同性婚は認められていない。現状を変えようと主張する議員の数は圧倒的に増えているが、反対派の数も多く実現には至っていない。

同性婚が認められると、法的効力のないパートナーシップ制度ではなかった様々な特典がつくようになる。相続税や保険の控除が適用される、国際結婚の場合のパートナーの永住権が認められる、遺産相続権を得るなど、法的な権利・社会保障の獲得が可能になる。

同性婚が実現すると、現在の異性婚と同じような問題点が浮かんでくるだろうが、今は異性婚と同性婚の間に格差が生まれている状態なので、格差をなくしてから問題点の解決を目指すべきだ。

（田中）

水泳競技九州大会出場

脇園さんと森さん　健闘

「次大会ではベストを叩き出す」

第86回末弘杯全九州高等学校選手権新人水泳競技大会が９月28日、29日、鹿児島市鴨池公園水泳プールで行われ、森大葵さん（２－２）が２００ｍ背泳ぎで33位、50ｍ平泳ぎで31位、脇園結名さん（２－４）が１００ｍ平泳ぎで31位、２００ｍ平泳ぎで18位の結果だった。

森さんは「長崎県代表として試合に出場したが、九州大会のレベルには圧倒された。上には上がいるとはこのことだと実感した」と圧倒された様子。大会前、森さんはフォームの癖を治すことと筋肉の増量、スプリントのタイム上げに力を入れて練習に励んでいたが、大会では練習の成果が出せていたそうだ。森さんは「今大会はレースの後半で思うようにタイムが伸びなかったので、持久力の強化を意識して練習に集中したい」と今回の試合を経てやる気に満ちたようだ。脇園さんは「２００ｍ平泳ぎについては、前半は予想タイム通りに入れたが、後半大幅にタイムが落ちてしまった」と悔しい表情。「次の試合までに改善してコーチを喜ばせたい。『気持ちがあればベストは出る』というコーチの言葉を忘れず、強い気持ちをもって泳ぎたい」と普段から支えてくれるコーチへの気持ちとともに抱負を述べた。

水泳部のエース、森さんと脇園さんの今後の奮闘に期待だ。

（菅）

水泳ポーズをする脇園さん（左）と森さん

女子バド中地区新人

ダブルス　塚原・早田ペア　ベスト12

シングルス　塚原　ベスト12

県大会への出場決定

県大会出場を決め、喜びをかみしめる早田さん（左）と塚田さん

県高等学校中地区新人体育大会バドミントン競技（女子）が10月19・20日、諫早商業高等学校体育館で行われ、ダブルスで塚原李佳さんと早田帆希さん（同２－１）ペアがベスト12、シングルスで塚原さんがベスト12の結果を残し、県新人戦への出場を決めた。

女子キャプテンの塚原さんは「選手は最後まで諦めずに頑張っていた。応援の声がたくさん聞こえてきてパワーをもらった」と試合を振り返る。団体戦は強豪校の諫早商業高校とあたり３位には届かなかったと悔しさを語る。

次は一か月後の県新人戦だ。塚原さんは「得意なショットを磨いて今回より良いプレーをしたい。ダブルスは楽しむことを一番に頑張りたい」と意気込んだ。次の活躍にも期待したい。

（山下）